うにおもった。

二　ヴァシリー・ミハイロヴィチ・タラソノフ著『古代諸民族の治療の反映としての医学の象徴』（一九八五年）。医学の紋章の歴史的背景をさぐっている本で、A五判一一九ページ。現在のイランで発見されルーヴル博物館に蔵されているグデアの酒盃（ラガシの王グデアが治療神ニンギシジダにささげた）について、まずくわしく論じている。この酒盃には二匹の蛇がからみついた木（カデュセウス）がほられている（現在カデュセウスはヘルメスの杖で、医学の紋章とは別物とされている）。蛇は天と地とをつなぐもの、水をもたらすもので、実り、豊かさ、生と死、よみがえりなどを象徴する。こういう広義において、グデアの酒盃におけるカデュセウスは医学を象徴していた。こののち蛇には知恵、商才などの意味もくわわり、その面をとりだしたのがヘルメスの杖である。アスクレピオスの杖では、自然の治癒力の一部分としてあったものが治療技術として人間のものとなったことがしめされている。このあとも医学の象徴はいくつか提示されたが、技術化の段階をしめすものとして、アスクレピオスの杖が医学の象徴としてもっともふさわしい。

タラソノフの本はこのように、古代文明史、民俗学、宗教学などのひろい成果にたって医学の象徴を論じている。時あたかも巳年、憑きもの関係でも蛇の問題はおおきい。タラソノフの本は翻訳したいぐらいにおもしろいが、関連事項がひろすぎて手におえないが、なんらかの形でくわしく紹介したい。

（平成元年一月例会）

旧約聖書の医学用語について

梶田　昭

分節化と名づけは、人間が対象を理解する基本の方法である。体の内景の区切り、名づけが解剖学、病気の区切り、名づけが疾病学（ノソグラフィー）である。諸民族は、それぞれの分節・名づけの体系をその言語としてもっている。（拙稿「記号論としての病理学」『東女医大誌』五七巻、一四一五頁、一九八七）。

旧約聖書はセム系言語で書かれた。医学用語もヘブライ人の思考様式を反映したものであったろう。ギリシア語、ラテン語をはじめ、近代の世界諸語に訳されて行ったとき、そのつど異種の分節体系に遭遇し、言葉の移しかえはコノテーションの移動を伴ったはずである。

レビ記三章四節他の「肝臓の尾状葉」（新共同訳）、申命記二八章二七節の「壊血病」（口語訳）、サムエル記上五～六章にいう「アシドド人の腫物」、レビ記十三章の「らい病」を例にとって論じた。

（平成元年二月例会）

奈良時代の医療の実態

杉田　暉道

奈良時代は仏教文化がおおいに栄えたので、これに伴いわが国